

関西学院大学新聞

2025年10月8日 第869号



■発行■

関西学院大学新聞編集部

〒662-0891

西宮市上ヶ原一番町1番155号

HP: www.kgpress.jp

X: @KG_shinbun

Instagram: kg_newspaper_club

混声合唱団エゴラド 歌の力で平和を願う

万博国連スぺシャルデーに出演

大阪・関西万博が4月13日から10月13日にかけて夢洲（大阪市此花区）で開催中だ。閉幕に近くにつれて終日満員の日が出るなど関西の盛り上がりは最高潮に達している。万博をさらに活気づけようと関学生の活躍も目立ち始めている。（関連記事は4〜6面）

アントニオ・グテーレス国連事務総長も鑑賞



合唱曲「もう一度」を歌う団員ら＝8月22日、EXPOナショナルデーホール「レイガーデン」、田川翔撮影

混声合唱団エゴラドが8月22日、大阪・関西万博EXPOナショナルデーホール「レイガーデン」で開かれた国際連合のスペシャルデーに出演した。関西地方で活躍する若い世代の積極的な参加をしてほしいとの思いでエゴラドに出演依頼があった。エゴラドからは計43人の部員が参加した。

式典には来日中の国連のアントニオ・グテーレス事務総長や高田宮承子さまが参列。その他一般人も含め500人を超える聴衆がいる大舞台の中、司会者が「世界中の音楽表現に共通する唯一の楽器は人の声、つまり歌ではないでしょうか」と紹介し、エゴラドは堂々と2曲のアカペラ合唱を披露した。

1曲目は「瑠璃色の地球」。正指揮者の内海小春さん（文学部3年）は挨拶で「人工物

に囲まれて生きる現代だからこそ、自然を慈しみ、地球に恩返しができる社会にしていきたい」という思いを込めて演奏した。歌詞の「ひとつしかない私たちの星を守りたい」のように参列者はこのかけがえない地球へ思いをはせた。

2曲目は合唱曲「もう一度」。副指揮者の川田悠悟さん（文学部2年）は挨拶で「この歌が誰かの心に届き、もう一度希望を持って生きたいと願う小さな声に寄り添うことを信じています」と語り、祈りを胸に歌い上げた。

合唱が終わると会場から大きな拍手が巻き起こり、1時間にもわたる壮大な式典を華やかに締めくくった。日本語が分からない外国人も多く集う万博の会場で、エゴラドは音楽、そして歌という世界共通の言語を通じて心を通わせた。その響きは国や文化を超えて広がり、聴衆をひとつに結びつけた。

チーフマネージャーの神長倉方結さん（法学部3年）はこの大舞台での披露を終え

Zoom In! 広島



2面

万博関連取材



4〜6面

いを共有し、団員の内面的な理解を深めることを意識しました。その結果、本番ではメッセージ性があり心に触れる演奏ができたと感じています」と振り返った。

内海さんはこれからの抱負として、「10月のコンクール、12月の定期演奏会に向けて技巧的な練習も重ねますが、常に「思いを伝える」ことを大切にしながら団員全員で音楽を作り上げていきたいです」と万博での経験をもとに次なる意欲を見せた。

万博で響いた歌声は、国や言葉を超えて観客の心をつけた。その経験を糧に、エゴラドの挑戦は続いていく。（田川翔）

古典芸能の魅力を伝えたい

夏の怪談会開催

古典芸能研究部は8月25日に、学生会館旧館で「上ヶ原で古典芸能に触れる会・夏の怪談会」を開催した。今回は落語の寄席で、月亭柳正さんと本学卒業生の桂三豆さんが登場した。

公演会の前半では、月亭さんが古典落語の演目「子ほめ」を披露し、話のまぐらでは自身の師匠や所属事務所をネタに会場の笑いを誘った。後半では、桂さんが怖い話「花畑の一本道、ジャラジャラ」と怪談落語「賤原川」をそれぞれ披露した。

特に、桂さんのオリジナルである「賤原川」では、音響の演出も相まって、観客らは話の情景をイメージしながら

中国・唐の詩人、李白が水面に映る月を取ろうとして命を落としたという伝説がある。李白の自由奔放な性格を象徴する逸話として語り継がれているが、理屈では説明できない、思わず触れてみたいと感じる月の神秘的な美しさも象徴していると思う▼日本でも、月は単なる天体ではない。夏目漱石が「I love you」を月がきれいですね」と訳したという逸話はよく知られているが、それは愛を直接語らずとも、月を介して想いを伝えるという日本人の奥ゆかしい精神性を表した言葉として、今も語り継がれている▼本学の校章である三日月も単なるデザインではない。三日月は、新月が満月へと満ちていく途中にある形。「絶えず向上し続ける」。そしてまた、月は自ら光を放つのではなく、太陽の光を受けて闇夜を照らしている。これは「他者の支えや恩恵を受けながら、世の中を照らす」。このような願いが込められている▼人は、生きているうちに何度も輝く瞬間がある。その度に、自分を輝かせてくれる人、そう支えてくれる人のことを忘れてはならない。成功の陰には、そっと背中を押してくれた友人や、時に厳しくも温かく見守ってくれた家族や恩師の姿がある。大きな夢を追う時も、小さな一歩を踏み出す時も、人は誰かの光を受けながら生きている▼その光は、かけがえのない存在に對して注がれる愛情ではないか。だからこそ、その光を受けて輝く姿は美しい。



公演を行った桂三豆さん＝8月25日、旧学生会館、高尾亮央撮影

豆さんは「演者を目指す人、いや鑑賞だけが好きな人でも楽しめる雰囲気がある。こ

れからも古典芸能の素晴らしさを伝え続けてほしい」と期待を寄せた。（井上隼人）



中国放送・坂上俊次アナウンサー

「夢のために可能な限りの正攻法を」

「夢や目標に向かう時は可能な限り一番確率の高い正攻法を取り続けることが大事です」と語るのは、坂上俊次アナウンサー（49）。1999年に社会学部を卒業後、中国放送に入社し、主にスポーツ番組を中心に数々の番組を担当している。

高校時代からアナウンサー

「夢や目標に向かう時は可能な限り一番確率の高い正攻法を取り続けることが大事です」と語るのは、坂上俊次アナウンサー（49）。1999年に社会学部を卒業後、中国放送に入社し、主にスポーツ番組を中心に数々の番組を担当している。

またメディアの勉強ができるという理由で社会学部を選び、ゼミは元毎日放送社員の津金澤聰廣先生のゼミに所属している。

「私の作った番組の企画を見て『子供がこの学校のこの部活に入りたいて決めた』と（その子の）保護者から言われたことがあって。実際、坂上アナが取材した広島県立祇園北高校（広島県広島市）野球部は紹介後に部員が増加した。そして2021年夏、第103回全国高校野球選手権広島大会でノーシードから決勝まで進む快進撃を見せるほど強くなった。

最後に坂上アナは「大学には学びの要素が全て揃っています。だからこそ授業をしっかり受けて多くのことを学んでほしい」と自身の経験をもとに学生へメッセージを送った。

「夢や目標に向かう時は可能な限り一番確率の高い正攻法を取り続けることが大事です」と語るのは、坂上俊次アナウンサー（49）。1999年に社会学部を卒業後、中国放送に入社し、主にスポーツ番組を中心に数々の番組を担当している。

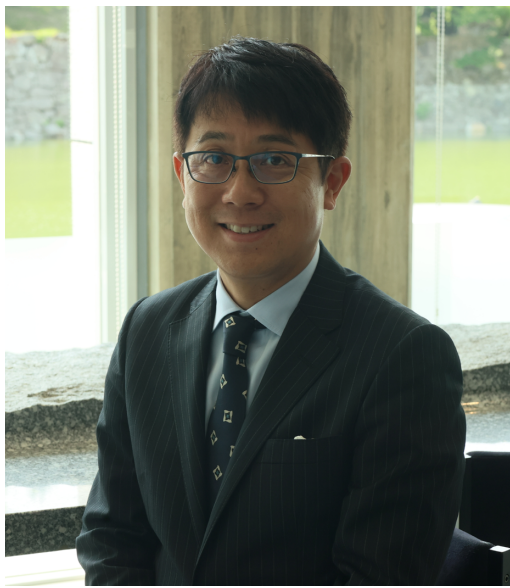
また、中川選手はリーグ記録を意欲した時期を第四節の立命館大戦と語る。「第四節が終わった段階で、（打率が）6割だったのではいけない

かなと思った」と振り返った。1番打者として出塁しチームに流れを持つてくるということを意識した結果がリーグ記録につながった。

一方、今春惜しくもリーグ3位という結果に終わった関学大。チームの勝利を最優先とする中川選手は「チームとして勝ち切る粘りや集中力が足りなかった」と課題を口にした。

秋からは秋季リーグ戦が開幕する。中川選手は個人の目標に2度目の首位打者獲得を挙げ、「（春は）長打が少なかつたので、同じ打ち方で長打も増やしたい。あと、盗塁の数も増やしたい」とさらなる進化も誓った。

チームはリーグ優勝と明治神宮野球大会への出場が目標だ。今秋もチームのリードオフマンとして打線を引っ張っていく。



坂上俊次アナウンサー（7月1日、中国放送（RCC）、久保田創士撮影）

坂上アナはそのチームの営業担当で多くの企業を訪問し多くの広告を取ってきたという。広告を多く取ってくる秘訣は「説明よりも、どこに行くか」が重要だ。学生に当時必要のあったカラオケボックスや英会話教室など、業種を絞って訪問した。

大学を卒業し、中国放送に入社後、坂上アナは現在までに広島東洋カープの実況を25年間、通算700試合担当してきた。

様々な実績を残してきた坂上アナが本学のスクールモットーである「Mastery for Service」を体現した瞬間は、「人の人生を変えた時、人の人生に決定的な選択肢を与えた時」と語る。

「私の作った番組の企画を見て『子供がこの学校のこの部活に入りたいて決めた』と（その子の）保護者から言われたことがあって。実際、坂上アナが取材した広島県立祇園北高校（広島県広島市）野球部は紹介後に部員が増加した。そして2021年夏、第103回全国高校野球選手権広島大会でノーシードから決勝まで進む快進撃を見せるほど強くなった。

最後に坂上アナは「大学には学びの要素が全て揃っています。だからこそ授業をしっかり受けて多くのことを学んでほしい」と自身の経験をもとに学生へメッセージを送った。

「夢や目標に向かう時は可能な限り一番確率の高い正攻法を取り続けることが大事です」と語るのは、坂上俊次アナウンサー（49）。1999年に社会学部を卒業後、中国放送に入社し、主にスポーツ番組を中心に数々の番組を担当している。

また、今春惜しくもリーグ3位という結果に終わった関学大。チームの勝利を最優先とする中川選手は「チームとして勝ち切る粘りや集中力が足りなかった」と課題を口にした。

秋からは秋季リーグ戦が開幕する。中川選手は個人の目標に2度目の首位打者獲得を挙げ、「（春は）長打が少なかつたので、同じ打ち方で長打も増やしたい。あと、盗塁の数も増やしたい」とさらなる進化も誓った。

チームはリーグ優勝と明治神宮野球大会への出場が目標だ。今秋もチームのリードオフマンとして打線を引っ張っていく。

戦後80年の節目

被爆の実相を写真で伝える

戦後80年の節目を迎える中、西宮上ヶ原キャンパス図書館1階のエントランスホールで6月11日から20日まで、広島・長崎の原爆写真展があった。広島・長崎の被爆直後の実相を伝える写真のほか、戦時中の関学大の様子が写した写真も展示された。

その中には、関学大生の学徒出陣の写真もある。学徒出陣で数百名の学生が戦死している。また、学業を休んで土木作業に従事している写真もあった。これらの写真の展示は今の学生に先の大戦にまつわる関学大の負の歴史に触れてほしいのがねらいだ。

そして、被爆者の講演会も6月18日に西宮上ヶ原キャンパスB号館で実施した。また、6月29日には広島平和記念公園でボランティア活動を通しての礼拝も実施した。関学大は今回の原爆関連の行事を通じて学生に核兵器の非人道性と平和について考えてほしいと述べている。

終戦から80年経った今、原爆写真展は私たちに平和とは何かを問いかけている。

（前川勇）



ヒロシマナガサキ原爆写真展の展示（図書館1階エントランス、6月20日、田川翔撮影）

おすすめのお店探偵隊！VOL.39

関西の地で府中焼きを！！ 広島府中焼おかだ

日本全国にある「府中焼」の地が、その一つとして挙がるのが、「広島のお好み焼きと関西のお好み焼き」だ。お互い個性を持ちながら、どちらのスタイルが優れているのか一つのバラエティとして多くの人が楽しく、熱く議論し合う。

そんな中、関西の地で広島のお好み焼きを提供しているのが「広島府中焼おかだ」だ。阪急仁川駅から徒歩1分ほどにある。

店主の岡田みゆきさんがお店を始めたきっかけは「府中焼をみんなに知ってもらいたい」という思いからだ。岡田さんは神戸生まれだが、父親の仕事のきっかけに広島県福山市に引っ越した。その際に、府中焼のおいしさを知った。

あえて府中焼を提供する理由については、「関西に広島焼のお店はたくさんあっても、府中焼の店はなかったと話した。

「府中焼は、一番のメニューはもちろんだ。府中焼は広島県府中市発祥のお好み焼きだ。」



看板メニューの府中焼



打席に立つ中川選手（体育会硬式野球部提供）

中川選手は今年春の成績に満足して「結果が残せたことは素直にうれしい。自分にとっても大きな自信になった」と笑顔で振り返った。

また、中川選手はリーグ記録を意欲した時期を第四節の立命館大戦と語る。「第四節が終わった段階で、（打率が）6割だったのではいけない

かなと思った」と振り返った。1番打者として出塁しチームに流れを持つてくるということを意識した結果がリーグ記録につながった。

一方、今春惜しくもリーグ3位という結果に終わった関学大。チームの勝利を最優先とする中川選手は「チームとして勝ち切る粘りや集中力が足りなかった」と課題を口にした。

秋からは秋季リーグ戦が開幕する。中川選手は個人の目標に2度目の首位打者獲得を挙げ、「（春は）長打が少なかつたので、同じ打ち方で長打も増やしたい。あと、盗塁の数も増やしたい」とさらなる進化も誓った。

チームはリーグ優勝と明治神宮野球大会への出場が目標だ。今秋もチームのリードオフマンとして打線を引っ張っていく。

みんなで「まちづくり」

白岩正三豊中市議員

参院選後、世間では政治關心が高まっている一方、特に若年層において、地方政治への関心が薄いという懸念がある。そこで、総合政策学部OBで豊中市議員の白岩正三議員にインタビューを行った。

白岩議員は高校在学時と大学卒業後にイギリスに留学している。松下政経塾、豊中市政研究所研究員を経て、2007年に豊中市議員選挙で初当選し、現在4期目だ。

「変わったことをしたかった」という思いで、高校在学時に留学を決意。実際に留学することで、言葉さえ通じれば、何でもできるという自信を体験したと話す。

その後、白岩議員は総合政策学部に入学する。入学時、まだ神戸三田キャンパスは完成しておらず、何もなかったそう。そこで、「このまま三田で埋もれているダメや」「自分の留学経験を仲間に伝えたい」という思いで、国際交流・国際協力支援団体 CLUB GEORDIEを創設した。白岩議員は関西にある各国の総領事館全てに手紙を出し、講演の依頼をした。気になることはやってみるという姿勢は今につながっていると言った。

次に、地方政治について伺った。そもそも地方政治は何のためにあるのか。白岩議員は講演などで必ず、「身近なことは市議会が決まっているんですよ」と説明する。医療費の助成が何歳まであるか。学校のトイレは洋式か。体育館に空調は付いているか。これらは自治体によって異なる。

このように、私たちの日常生活に大きく影響することを決定するにも関わらず、地方選挙の投票率は低い。地方政治への関心の低さについて、白岩議員は「政治家の責任も大きい」とした上で、市民には地方政治を「政治」と捉えるのではなく、みんなで言う「まちづくり」と捉えてほしいと話すが印象的だった。白岩議員の普段の活動は、議会での活動に加えて、地域のイベントの運営、市民の声を聞くための「まちづくり座談会」の開催、市政には関係がない個人の相談に乗ったりもしている。

最後に大学生に向けて「動くことが大事」とメッセージを送り、チャレンジしたり、実際に足を運んで話を聞いたりすることが大切だと強調した。（仲悠王）



インタビューに笑顔で応じる白岩正三議員＝9月2日、豊中市役所議会棟、田爪翔撮影

登学生らが笑顔を届ける

第7回能登半島地震現地ボランティア

ボランティア活動支援センターヒューマン・サービス支援室は、8月8日から10日にかけて、第7回能登半島地震現地ボランティアを実施した。学生らは石川県七尾市中島町の仮設住宅と豊川地域で、地域住民との交流やイベント支援に取り組んだ。

仮設住宅では、集会所と仮設住宅付近の集会所で、風鈴づくりや神経衰弱、カルタなどを楽しんだ。カルタの札には能登や関西の食べ物や祭りなどを取り入れ、お互いの文化を知る工夫が施された。豊川地域では計23人の子供たちに勉強を教えたり、地域の魅力を教えてもらったり、縁日を盛り上げた。途中、熊本県の公式キャラクター「くまモン」が復興応援「絆大使」としてサプライズ登場。子供たちや学生らを驚かせた。

手拍子に合わせてダンスを披露する場面もあり、会場は笑顔と拍手に包まれた。分館長の井田正輝さんは「学生さんが積極的に参加していただいて、子供の喜んだ笑顔が見られてよかった」と穏やかな表情を浮かべた。の絆を感じた」と語った。（田爪翔）



子供たちの手拍子に合わせてダンスをする「くまモン」＝8月10日

福島の本場の今を知る

原発問題特別演習「福島」

「福島から原発を考える」

ハンスオン・ラーニングセンターは8月25日から28日にかけて、福島県で原発問題特別演習「福島」を福島から原発を考えるを開催した。これに先立ち、22日には事前学習を実施し、長崎大学の鈴木達治郎教授が特別講義を行った。現在の原子力政策の課題について学生との意見交換の場も設けられた。

実習期間では、福島県浪江町を中心に、双葉町の帰還困難区域の視察や福島水素エネルギー研究フィールドの視察、東京電力福島第一原子力発電所の見学や中間貯蔵施設の視察など、多岐にわたるフィールドワーク形式で行われた。

この実習を終えた事後学習で、受講者が口をそろえて語ったのは「現地に足を運ぶ前と全く違う感覚をもった」ということだ。

震災から14年という長い歳月をかけてもなお、廃炉作業が滞る福島第一原発の現状を目の当たりにし、バリケードが張られ、廃墟化した建物がそのまま放置されている様子をみて、一瞬言葉が失った。想像していたよりも、福島の復興に向けた現実が厳しいものだった。

現地では、福島の復興に携わっている多くの人と話を交える機会があった。福島県庁



震災から14年経ってもなお、復興への道のりは長い。8月27日、中間貯蔵施設から福島第一原発を望む、山下結大朗撮影

演習では未来のエネルギーの在り方についても考えた。8月26日、福島水素エネルギー研究フィールド、山下結大朗撮影



で復興に向けて日々奔走している佐藤安彦さんは、「同じ福島県民のなかでも、原発のある浜通りを見ていない人がいる」と語り、14年という長い年月の経過による問題の風化を懸念した。

また、現地にいる人にとどのような支援をすることが有効なのかという質問に対して、現地の方に「大変だったね、頑張っているね、と励ましの声をかけることが実はとてもありがたいことだ」と話した。原発から出る、いわゆる「核のゴミ」の最終処分場が決まらずにいるが、その事実が国民にあまり浸透していないという現実がある。これについて、環境省の西村治彦大臣官房審議官は大学生に対して、「福島の現状をちよつと知るだけでも良い」と訴え、問題の解決にはそういった積み重ねが大切だとメッセージを送った。

最終処分場の問題には「Not in my backyard」という考えが深く関係している。社会全体には必要だと認める施設でも、自分の近隣に作られることには反対する住民の態度やその心理傾向のことだ。ゴールが見えない問題を解決する糸口は、国民一人ひとりが自分事として向き合うことだと感じた。

福島県の内堀雅雄知事はかねてから「復興は道半ばにではなく、途上である」と訴えている。これは、問題が山積しており、復興のゴール、ゴールの先を考えることができないという意味であると佐藤さんは語る。原発の廃炉や風評被害の問題は今も根深く残り、苦悩が絶えない。

この講義を担当した、news zeroの元キャスターで、関西学院大学東京丸の内キャンパスの村尾信尚教授は主体的積極的な「active participation」の姿勢が大切であると強調した。メディアの報道やネットの情報などとは全く違う本場の姿がそこにはある。（山下結大朗）



日加学生、カナダパビリオンで発表会

ビジネスプランを英語で

学生らが堂々と英語で質問に回答した。

「ビジネス英語を学ぶため本プログラムに参加した大島杏奈さん(社会学部2年)は「日本とカナダの学生の間に知識や文化の差があり、共同作業をするのが大変だった」と振り返った。

大島さんのグループは「万博を利用してカナダ留学をPRするための戦略」という課題に取り組んだ。同グループは、万博と既存の留学フェアに周遊型イベントを追加し、さらに2028年の日加外交100周年を記念したイベントを催すことを提案した。長期的な計画にすることで継続してカナダを広報することが目的だ。

本プログラムには海外経験がある学生が多く参加した。その一人の金子麗さん(国際学部3年)は、「外国人に混ざる経験は今までにあったが、今回は日加学生が同じ比率で参加していたことで、あ



カナダ留学をPRする計画を発表している金子麗さん

関学よさこい連炎流

万博を舞台に熱演

関学よさこい連炎流は8月3日、EXPOアリーナ「Matsumi」で行われた「にっぽん真ん中祭りin大阪・関西万博」に出演し迫力ある演舞を披露した。

「にっぽん真ん中祭り」とは通称「ごまつり」と言われ、日本の中心・名古屋を舞台に行われる国内最大級の踊りの祭典。今回は大阪・関西万博で2日から3日にかけて

開催された。

演舞のテーマは「灯、結ぶ街」。昼の喧騒から夜の幻想的な雰囲気へと移り変わる街の表情を4分あまりの演舞で全身を使って表現した。中華

の「変面」や獅子の要素を取り入れたカラフルな衣装と、大人数による息の合った踊りが相まって、壮大なステージが完成。観客を魅了した。

副代表の中條那菜さん(社会学部3年)は、「一生に一度のステージに立てて、楽しかったです。これからも日々の練習を頑張っていきます」と話した。(越智優介)



演舞の様子＝関学よさこい連炎流提供

未来の技術でいのちを救う

PASONA NATUREVERSE

大阪・関西万博では国・地域や国内企業など全84ものパビリオンが出展している。今回、国内外4つのパビリオンに独自取材を行った。

大阪・関西万博の会場にひととき目を引く白く曲面的な建物がある。総合人材サービス大手のパナソニックグループが出展するパビリオン「PASONA NATUREVERSE」だ。1日に約1万人が訪れる。

パビリオンのコンセプトは「いのち、ありがとう」。本学OGの人見知佳さん(総合政策学部卒)が副館長を務める。館内に入り、最初にあるのが「いのちの歴史ゾーン」。

「過去から現在、そして未来社会に旅をしていただけます」と人見さんは話す。真つ先に「生命進化の樹」が目に入る。地球の生態系を10の段階で表しており、いのちの循環を視覚で体感できる。生命誕生から人類の誕生、インターネット、AIの進化と現在につながっており、いのちの誕

生からさらなる循環と未来を表している。

少し進むと、世界最大級のアンモライトと、天井から奥へと伸びる2063本の糸が目に入る。この糸は、広島県の原爆資料館にある被爆者の遺品を実物より大きく作られた

懐中時計と万年筆へとつながる。この「2063」という数字は世界で行われた核実験の回数を示しており、パナソニックは未来だけでなく過去のいのちにも目を向けている。

次に進むとあるのが、「からだゾーン」。パビリオンのナビゲーターを務めるアニメキャラクター「アトム」に「iPS心臓」を移植して生まれ変わった「ネオアトム」の映像から始まる。

次の場所では、再生医療の第一人者である大阪大学を誉教授の澤芳樹先生が開発する



iPS細胞で作られた心筋シート＝8月14日、田爪翔撮影

その後の展示では、「空飛ぶ手術室」、「装着型ロボットHAL」や遠隔操作できるロボットなど未来へ実用化が進められている技術が並ぶ。

パナソニックの最後は「こころきずなゾーン」。本パビリオン最大のショー「NATUREVERSEショー」で25個の動くキューブに映し出される映像は、韓国の企業が撮った。キューブが配置を変えながら映像と連動する姿は目

撃を奪われる。人見さんは特に見てほしいところの一つに「パビリオンの建物」を挙げる。「直線の鉄骨をいくつも使って曲線にくみ上げた建築に膜を張るという難しいことをしている」。建築会社との綿密な打ち合わせが完成に結び付いた。

最新の3Dモデルを使ってパビリオンの最大の特徴であるアンモナイトの「螺旋形状」を描いている。最初の「いのちの歴史ゾーン」ではあえて鉄骨がむき出しになっていたという特徴のある構造となっている。



工場での点検を終えた後、パナソニックグループが現在、地方創生の取り組みを進めている淡路島に移築される。人見さんは学生に向けて「学生時代は時間がたくさんある。関学は万博会場に近いいのでぜひ関学生の皆さんに来ていただき、万博でしか味わうことのできない体験をしてほしい」と話した。(田爪翔・今村早織)

未来のエネルギーを体感できる 電力館 可能性のタマゴたち

東ゲートを抜けて少し歩くと、銀色のタマゴ型の建物「電力館可能性のタマゴたち」が姿を現す。出展する電気事業連合会は、これまで4回国内万博に出展しており大阪・関西万博では、新たなものが生まれてくるような可能性の象徴として「可能性のタマゴ」をコンセプトとしている。

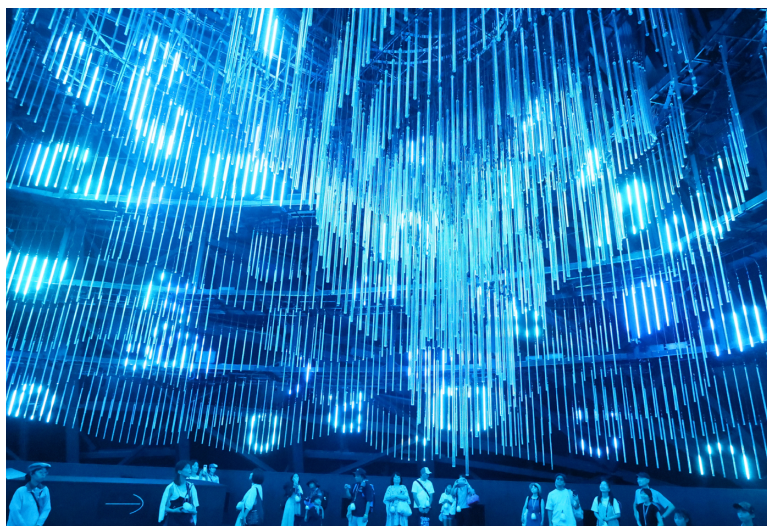
館内に入ると、光るタマゴ型デバイスを受け取る。このタマゴは、プラスチック削減のため、卵の殻やホタテの貝殻が配合されている。館内は「プレショー」「メインショー」「可能性エリア、輝きエリア」「ポストショー」の3つに分かれる。

「プレショー」では、これから体験するエネルギーの可能性を映像で紹介する。

「可能性エリア」には約30種類の展示が並び、振動を利用して発電する「振動力発電」「無線給電」を学ぶショー



核融合を体験するゲーム＝8月4日、電力館、村山諒撮影



無数のLEDを使った「輝きエリア」のショー＝8月4日、電力館、村山諒撮影

ティングゲーム、直流送電を体験するゲームなどがある。中でも人気は「核融合」のコーナー。

体験では、重水素と三重水素に見立てた赤と青の玉を同時に手元に引き寄せてくっつける（融合させる）ゲームに挑戦。実際の核融合と同様に、赤と青の玉が反発するため融合させることが難しい仕様となっていた。また、5月には愛子さまも体験して話題となった。

そのほか、潮流を利用した発電、食品廃棄物を発酵させて発電に活用する「フード・エネルギー・サイクル」など、環境に優しい再生可能エネルギー

光と音楽が織りなす空間 ハンガリーパビリオン

海外の民族音楽を生で聴くことができる万博。東欧の国・ハンガリーのパビリオンは森をイメージした建物だ。木組みの外装と葉に見立てた短冊状の装飾。「ひらひら」と日本語を使って言われるその装飾は、会場に吹く海風でたなびいている。

パビリオンの中に入ると出迎えるのはガラスアート。世界各国の言語が小さく織り交ぜられたアートは自然がモチーフだ。

通路を歩き、少し開けた場所の天井のライトはスズランがモチーフだ。まるで来場者が小さくなったかのように感じる。

さらに奥へ進むと、暗いドーム型のシアターが広がる。シアターはライトによって星空のような印象を受ける。その光に包まれた空間の中央には、民族衣装をまとった女性が凛と立っている。彼女を取り囲むように椅子が配置され、来場者はそこに腰を下ろす。ざわめきが収まったころ、歌声と音楽、そして光



歌声を披露する女性＝8月22日、ハンガリー館、田爪翔撮影

の演出が一斉に始まる。歌はもちろん日本語ではない。しかし、響き渡る声と身体動き、音楽と光が織りなす表現は、言葉を越えて人々を魅了する。数分間の体験は没入している内にすぐに終わった。

インターネットが発達した現代では、どこにいても音楽を聴くことができる。だが、その場でしか味わえない音の震えや光の演出は特別だ。

また、パビリオン内のレストラン「ミシュカ キッチン&バー」ではハンガリーならではのパブリカがふんだんに使われた料理やワインなど、食文化を体験できる。

シェフのヴィンセント・ゾルターンさんは、日本でハンガリー料理を作るにあたって日本タマゴやニンジンなどの調整が難しかったという。また、ハンガリー人と日本人の味覚も考え、塩分を控えめにする工夫も行った。

物販コーナーにはハンガリーパビリオンのイメージに沿った製品や、マスコット

キャラクター「ミシュカ」と「マリシュカ」をあしらったグッズなどが並んでいる。ハンガリーパビリオンでは五感を使ってハンガリーを味わうことができる。（田爪翔）

伝統と未来を五感で体験 フィリピンパビリオン

2025年大阪・関西万博に出展中の「フィリピンパビリオン」が、来場者から注目を集めている。パビリオンマネージャーのマルガリータ・サン・ホセさんに話を伺った。

フィリピン館の出展目的は、フィリピンをアジア太平洋地域における主要な観光地、そして投資の拠点として発信することだ。準備段階では時間や労力、物流面で大きな挑戦があった。

特に、外観を飾る212枚の手織り布の展示は、国内各地の職人による過去最大規模の協働であり、良い意味で「難しくも価値ある挑戦」だったという。

館内では、18地域を表現し



パビリオンマネージャー

た大規模な手織り作品のほか、AIフォトブースや「Dance with Nature」と題した体験型展示、伝統舞踊やフィリピン料理、伝統マッサージ「ピロット」の体験など、多様なプログラムが揃う。来場者が五感を通じてフィリピン文化の温かみや創造性を感じられる工夫が施されている。

パビリオンマネージャーのお勧めは、15分間体験できるピロット。「先祖代々受け継がれてきた独自の療法で、多くの来場者が体験を希望して行列ができるほど人気です」と話す。また、冷たいドリンクやかき氷「ハロハロ」など、日本の夏に合わせたメニューも提供している。

若い世代に注目してほしいのは、AIと映像を駆使した



織物とフィリピン各州の説明が組み合わさって展示されている＝8月20日、仲悠士撮影

展示だが、同時に伝統織物の背景にある物語も伝えたいという。

館のテーマは「自然・文化・共同体」よりよい未来をともに織りなす。テクノロジを取り入れながら、自らのルーツを理解し未来へつなぐ姿勢を示している。

来場者との対応で印象的なエピソードとして、手織り展示を見た来場者が「今すぐフィリピン旅行を予約したい」と話し、具体的な旅程を熱心に質問したという。観光促進という大きな目的が達成できた瞬間だった。

来場者は日本人が中心だが、在日フィリピン人や外交関係者、他国パビリオンの関係者も訪れている。館長は「観光・貿易・投資の拡大に向け、ここで築いたつながりを将来の協力関係につなげたい」と万博参加の意義を語った。

鮮やかな展示やぬくもりある空間に触れることで、来場者はフィリピンの魅力と共に、持続可能な社会の在り方を肌で感じることができる。

（田爪翔）

関西学院交響楽団、万博「電力館」で熱演

多彩な曲目と楽器体験で観客魅了

関西学院交響楽団は9月2日、大阪・関西万博の「電力館」可能性のタマゴたちの野外ステージで演奏会と楽器体験会を開催した。

今回の出演は、コンサートマスター小林文栄さん（教育学部4年）が知人の紹介で万博関連団体のレセプションに招待され、団の活動を紹介する機会を得たことがきっかけだった。その場で電力館館長から声をかけられ、出演が実現した。

当日は「愛の挨拶」「チャイコフスキーの弦楽セレナーデ」「セントポール組曲」など、時代も作風も異なる多彩な曲目を披露。合計11回の公演はいずれも満員となり、電力館の入場待機列からカメラを構える来場者も見られるほどの盛況ぶりだった。

午後3時30分頃からは楽器体験会を実施。この日は気温35度を超える猛暑日でも人を集めるのが難しい状況だったが、団員たちはステージの外まで出て呼び込みを行った。その結果、子供から大人まで幅広い世代が参加し、バイオリンや管楽器に触れる貴重な機会となった。

「できるだけ多くの団員にステージに立つてほしいから、練習や日常の演奏会準備と並行しながらの調整は大変でした」と小林さん。今回は54人が出演し、交代制で熱

“自分が万博をつくっている”

関学生の万博ボランティアの目線から

「まるで世界旅行のようだった」。大阪・関西万博の会場ボランティアで来場者に道案内をする稲畑優貴さん（文学部3年）は、万博会場に初めて訪れたときの感想をそう振り返る。ボランティアとしてネイビーを基調とした公式ユニフォームに袖を通

し、タブレットを手に、国内外の人々とコミュニケーションを重ねた。

彼が担当したのは、会場内での「エリア活動」。4、5人のチームを組んで来場者の案内をする。トイレや喫煙所、パビリオンの混雑状況などを尋ねられ、時には英語で対応

する場面もあった。予想を超える多様な質問や文化に触れる日々には、「自分が思っていた以上に、世界が大阪に集まっている」と実感したという。

ボランティアに参加したきっかけは、高校時代に出会った留学生の言葉だった。「東京五輪でボランティアがしたい」。異国から来た友人の姿勢に影響を受け、「自分も大きなイベントに関わってみたい」と思い立った。

現場で印象に残っているのは、同じエリアで活動していたボランティアの存在だ。道案内用に自作のマップを作っていて、その熱意に驚いた。中高年層が多い中で、大学生の参加者は比較的少ない。だが



万博「会場ボランティア」のユニフォームを身に着ける稲畑優貴さん

からこそ、「担える役割はある」と意識するようになったという。

活動を通じて、自分の未熟さにも気付かされた。初めは戸惑いも多く、「もつと事前調べておけばよかった」と反省。その後はボランティアの研修動画を見直し、スムーズに案内できるよう準備を重ねた。

「ボランティアって、助ける側というイメージだったけど、自分が学ぶことの方が多かった」。来場者の笑顔や



関西学院交響楽団の演奏の様子＝9月2日、電力館屋外イベントステージ、近藤帆乃佳撮影

小林さんは「万博という特別な場で音楽が持つ力を改めて感じた。国境や言語を超えて人々の心が一つになる瞬間に立ち会えた」と語る。

楽団は今後も地域や協会での演奏活動を企画し、音楽の輪をさらに広げていく。

（田川翔・山下結大朗）

ギャラリーレポート

特別展・非常の常 国立国際美術館

「私たちは今、常態化した非常事態を生きている」をテーマに、写真や映像を通して日常の中に立ち現れる非常事態を見つめる。特別展・非常の常が国立国際美術館（大阪市）で開催中だ。

展示は、ロンドンを拠点に活動する写真家、米田知子の非常の跡と日常を写した写真から始まる。絡まった有刺鉄線の周りに咲いている色とりどりの花。阪神・淡路大震災で大きな被害を受けた地域の避難所跡にできた公園。

どの作品も、日常が非常事態を覆うようにして進んでいるように感じる。

次に、ハッとするような轟音と共に映し出されているのは、台湾を拠点に活動する袁廣鳴のビデオアート。日常生活に突如として入り込む戦争の恐ろしさを表現する作品には胸を突かれる。

そして、言葉の多面性に関する映像作品を手がける高橋喜代史の作品も印象的だ。札幌の街中で、作者が壁に「助けて！」と書かれたポスターを掲示していく映像。何人の通行人が手助けしてくれるのか、言葉の影響力に加えて、日本人の困り者への認識率が低いことを表現している。

また、日本人が間接的に社会問題に接する様子を記録した映像も見ることが出来る。無料でスイカジュースを配布する「フリー・スイカ・バー」。作者はパレスチナ問題を考えるきっかけとして、このイベントを開催。しかし、あえて「パレスチナ」という言葉を使わずに実施している様子が流れている。日常生活の中に潜む非常を表現している芸術。作者の社会問題に対するユニークなアプローチを体感できる。

いつもそこにある非常事態と私たちはどう生きることが出来るのか。紹介した3人の作家に加え、8人の作家の常態化した非常事態を表現した作品が問いかける。（森友紀）

Oktaハンドブック刷新

利用者目線で改訂

スラックでICT情報も発信

本学の認証サービス「Okta（オクタ）」をまとめたハンドブックが今夏リニューアルされ、最新版が公開された。情報化推進機構による、従来の操作手順中心の構成を見直し、利用者が目的の設定方法に直感的にたどり着けるよう検索性を重視して整理したという。最新版ハンドブックは学内ウェブサイトで閲覧できる。

発信されている。

スラックはポータルサイト「k-wic」からログイン可能で、キャリアセンターの情報など、ポータルだけでは伝えきれない内容も掲載している。スマートフォンやパソコンから利用でき、チャンネルごとに通知設定を変更できるため、関心のある分野の情報を逃さず受け取ることが出来る。

さらに、オクタをはじめとするICT関連情報は、コミュニケーションツールSlack（スラック）内のチャンネル「#ICT豆知識」で発信されている。

情報化推進機構職員の北尾優さんは「より多くの学生がスラックを活用し、有益な情報を受け取ってほしい」と話している。（越智優介）

Mastery for Service

羽ばたけ、世界市民

神戸市営住宅・兵庫県営住宅ほか
電気設備保全会社 畑中電気合同会社

〒653-0834
兵庫県神戸市長田区川西通5丁目107番地の8

子供の夢応援プロジェクト2025

阪神近本選手の母校・関学大で開催

関西学院大学は7月26日、連携協定を締結している一般社団法人LINK UP主催の元「子供の夢応援プロジェクト2025」を開催した。

「子供の夢応援プロジェクト2025」は、関学大の卒業生で阪神タイガースに所属する近本光司選手（30）の故郷である淡路島や、自主トレーニング先である沖永良部島の小・中学生を招待して様々な体験を提供するプロジェクトだ。

プロジェクトを始めたきっかけについて、LINK UP代表理事の石井僚介さん（32）は「大学がなく、電車が走っていない島の子もたちに五感を通していろいろなことを知ってもらいたい」と思って去年からスタートしたと語った。

当日は淡路島在住の小学5・6年生10名、沖永良部島在住

Yuuさん（国際学部3年）は、YouTubeバーとして関学大の情報や魅力発信している。山口県出身の彼女にとって、関学大は遠い存在だった。ゼロから大学の情報を得ることに苦勞した自身の経験から、関学大のリアルな情報を伝えたいという思いで、1年時に発信者としての

の小学6年生・中学1年生6名の計16名が参加した。

子どもたちはまず、人間福祉学部社会起業学科の柴田ゼミに所属する大学生とワークショップを行った。

ワークショップでは子どもたちが住む離島の魅力や再資源を再発見するためのカードゲームを行った。「島民のみんで盆踊りをしたい」「島を舞台にした人気キャラクターの映画作成」など、子どもたちは柔軟な発想でアイデアを出し合った。

子どもたちの楽しんでいる姿に、石井代表理事は「すごく積極的な手を挙げて質問し、能動的で嬉しい」と笑顔だった。

また、柴田ゼミに所属し今回のイベントの企画に携わった小菅優衣さん（人間福祉学部4年）は「私たちでは思いつかないアイデアがいっぱい

活動を始めた。これまで30本以上の動画を投稿してきたYuuさん。「詳しく伝える」ということに焦点を当て、あえてYouTubeを選んだ。実はパソコン操作に苦手意識があり、すべての動画をスマートフォンで編集しているという。写真をもパソコンに移すのがもう

出てきた。とても楽しかったと達成感を口にした。

午後の部では西宮上ヶ原キャンパス内を見学した。子どもたちはわくわくした表情を浮かべながらG号館101教室、ランバス記念礼拝堂や中央芝生を訪れた。

15時過ぎからは阪神甲子園



子どもたちの質問に答える近本選手＝7月26日、阪神甲子園球場、田爪翔撮影

球場で試合前の練習をしていた近本選手と面会。子どもたちは緊張しながらも目を輝かせていた。子どもたちは二人一組で近本選手にインタビューを行い、数々の質問をぶつけた。

ある子どもに「チャンスの打席の時は緊張しますか」と聞かれた際、近本選手は「そのチャンスの打席を緊張するのではなく楽しむことが大事だ」と笑顔で答えていた。

（久保田創士・前川勇

西宮地区BBS会

夏のグループワークを開催

芦屋市総合公園（兵庫県芦屋市）で8月31日、西宮地区BBS会と保護司が共同で夏のグループワーク（以下GW）を開催した。

BBS会とは更生保護に係る青年ボランティア団体だ。さまざまな問題を抱える少年と身近な存在として関わりながら健全な成長を支援し、犯罪や非行のない明るい社会の実現を目指す。

西宮地区BBS会には多くの関学大生が所属し、熱心に活動している。GWは少年とその保護司、そしてBBS会員が一緒になって、活動を楽しむことで少年たちが共感したり、心を開いたりするきっかけをつくる活動だ。

今回のGWでは、バーベキューを行った。保護司とBBS会員がテントの設置や焼き台の用意をし、しばらくして少年たちが到着すると、自

己紹介を兼ねたレクリエーションが始まった。最初は緊張していた少年たちも次第に打ち解け、笑顔でレクリエーションを楽しんでいた。

食材を焼き始めると食欲をそそる匂いが会場で広がった。少年たちも積極的に調理に参加し、バーベキューを満喫した。皆でテーブルを囲み、焼きたての肉や野菜、魚を頬張りながら談笑した。

片付けが始まると、少年たちは率先して荷物を運んだり掃除をしたりした。

最後に、一人ひとりがGWの感想を発表した。楽しかった「来てよかった」「また参加したい」と明るい声で話す姿が印象的だった。

今回のGWを通じて、西宮地区BBS会会長の庄司連さん（社会学部3年）は「無事に活動を終え、参加した少年に楽しんでもらえてよかった。と充実感を口にした。

この学生に注目！「リアルな情報を届けたい」国際学部生Yuuさん

駄目だ。スマートフォンは画面が小さいから、特に長い動画を撮るのは大変です」とはにかんだ表情で話した。

Yuuさんのチャンネルである「Yuu's vlog」の一番の特徴は、コメント欄ですべての質問に答えることだ。関学大への入学を志す高校生や、新生活に不安を感じる新入生の質問一つひとつに丁寧に向き合っている。「正しい情報を早く届けることで、不安や疑問を解消できた

ら良い」とYuuさんは語る。さらに、新入生を対象としたイベントに積極的に関わって直接声を聞き、動画に活かしている。「3年生の自分にとって当たり前の情報も、新入生にとっては知らないことなのだと気づく」という。

「やる気があれば何でもできる充実した環境だということを知ってもらって、関学大に興味をもってもらいたい」とほほえんだ。

現在、Yuuさんは就職活



Yuuさん＝本人提供

動中だが、チャンネル登録者数1000人を目標に掲げ、

動画投稿を続けている。（八島みのり

学生課に聞く 大学生とマルチ商法 闇バイトとの関係に迫る

た。」と充実感を口にした。また、今後の活動について「悩みを抱える少年のための活動であるという基本方針を第一に据えながら、私たち自身も成長することができると活動を目指したい」と向上心あふれる姿勢を示した。

更生保護を取り巻く環境は絶えず変化している。令和5年には更生保護法の改正が行われ、「息の長い支援」の実現を図っている。環境が変わることも、BBS会は少年一人ひとりと向き合うことを大切にしている。（杉谷拓樹）

（外国為替証拠金取引）への投資、転売のために高額なスマートフォンを購入を強要されるといった手口も増えており、大学も警鐘を鳴らしている。

被害者の特徴を尋ねると、主に「二つを挙げた。一つ目はお金が欲しいから話だけでも聞こうという人。このような人には、簡単な儲け話が魅力的に聞こえるからだ。そして、押されて断る勇気がない人。相手の勢いのままについていってしまう人も多い。

実際、「最初は軽い気持ちで説明会に行ったんだけど、帰る頃には高額な商品を購入させられていた」というケースもある。

学生課職員は、「簡単に儲かるなんていう甘い話はない。騙されてしまった人は被害者だけでなく、加害者にもなりうる」と特殊詐欺に関わる受け子や出し子として利用され、逮捕される若者も少なくないことを強調した。

学生課は「確かな知識」と「断る勇氣」を身につけることが何より重要だと訴える。そして、誘われた時や迷った時は、決して一人で判断せず、信頼できる大人や友人に相談することが大切だ。

（佐藤朝陽

交響楽団第145回定期演奏会

心を動かす演奏を目指して

関西学院交響楽団は8月11日、兵庫県立芸術文化センターKOBELCO大ホール（兵庫県西宮市）で第145回定期演奏会を開催した。

テーマは「新世界への旅路」ドヴォルザークと祖国の調べ。指揮者の鈴木優人さん（44）を迎えてドヴォルザーク「チェロ協奏曲」短調作品104や「交響曲第9番」短調作品95「新世界より」などを披露した。

本番直前、部長の児見山舞香さん（経済学部4年）は今回の演奏会への取り組みや意

気込みについて、「クラウドファンディングなど新たな試みで、音楽性を高めることで、交響楽団の可能性を広げたい。今後も、学生中心のコンサートをきつかけに、クラシックを気軽な感覚で親しんでもらいたい」と思いを述べた。

元関西学院交響楽団で指揮者として楽団のトレーナーを担当した浦優介さん（36）は今回の演奏会に向けて励んだ練習について、「音程やビッチを超えて楽譜から離れた部分について、作曲者の意図や

表現したいことは何かを読み取り、その部分を核とすることで、音楽性を高めていった」と、あらゆる角度から練度を向上させることを意識した。

また、浦さんは学生オーケストラの良さは「感情を乗せられること」と話す。今のメンバーで演奏ができるのは今しかない、という環境の中で音楽を奏でる、その情熱こそが関西学院交響楽団の一番の長所であり、これからも引き継いでほしいと楽団員の先達としての願いを口にした。

指揮を務めた鈴木さんは今回の共演について、「学生オーケストラは時間をかけて練習するので日程的に難しいこともあるが、今年は実現できて本当に良かった」と笑顔で話した。

今回のプログラムの選曲には鈴木さんも携わった。演奏曲の魅力にも言及し、「どちらも本当に素敵な曲。本番で新たな音楽を作り上げられるのが楽しみ」と笑顔で語った。

最後に鈴木さんは、「音楽は予習しなくてもその場にいるだけで心に響く。日々の悩みや喜びとともに音楽を受け止めてほしい」とメッセージを送った。

本番「チェロ協奏曲」では、チェロ独奏にチェリストの山本裕康さんを迎え、力強い旋律とオーケストラの響きが会場を満たした。プログラムの最後を飾った「新世界よ



©Koki Tsumura

演奏の様子―関西学院交響楽団提供

教授の背中

人間福祉学部の藤井美和教授は、死生学を研究している。

死生学とは、死ぬまで生きる人間がどう生きるかを考える学問である。神学、宗教学、哲学などの形而上的分野を含んだ学際的な学問であることが特徴だ。

藤井教授は、2025年4月、死生学などの専門家による学会「Association for Death Education and Counseling」において、「Academic Educator Award」を日本人で初めて受賞し

「では、暖かく切ないメロディーから情熱的な旋律に移り変わり、演奏後は割れんばかりの拍手に包まれた。

公演後、コンサートマスターの小林文栄さん（教育学部4年）は演奏会を、「学生の持ち得る技術の限界を超え、情熱こそが音楽を動かす力であるという信念を証明する場であったと思う」と充実した表情を浮かべた。「プロには技術で及ばなくても、情熱で人の人生を変えることはできる」。関西学院交響楽団内で掲げてきたこの想いは、空虚な言葉ではなかった。

小林さんは、第145回定期演奏会を到達点ではなく出発点とし、人の心を揺さぶり、人生を変えるほどの演奏を追い求め続ける。

（山本一貴・梅田芽衣）

人間福祉学部・藤井美和教授 死ぬまで生きる人間はどう生きるか

た。

大学では刑法を勉強し、新聞社に就職した。入社して6年目、急性多発性根神経炎という病気になる、3日間は全身麻痺で呼吸すら困難だった。

3日前までは充実した生活を送っていたと思っていたが、自分本位であったことが、そばにいてくれる家族を気遣ってこなかったことにはった。

死に直面した時に見る世界は、普段見ている世界とはまるで異なっていた。それから生きるものの目的や意味、人生そのものについて考えるようになった。

そして存在意義を見いだせず苦しむ人に自分ができることはないかと思ひ、会社を辞め、関西学院大学社会学部に学士編入した。修士課程を終了後、ワシントン大学でがん患者の生活の質（QOL）を研究し、博士号を取得した。その後、現在まで関学大で死生学の講義を行っている。

藤井教授のゼミ活動では、学生が好きなテーマを選択し、死に関する問題のディスカッションを行う。ゼミ生は時には今まで培ってきた考えや意識に揺らいだり苦しんだりしながら、社会や世間の価値観を構成する社会の一員として、自身が持っていた価値観を見直す。

藤井教授は、学生には自分の考え方や価値観、いわゆる「ものさし」の根源を探ってほしいという。

世の中の「ものさし」を包容しすぎると、その「ものさし」で測ることのできない自分自身を受け入れられない時がある。学生には「ものさし」を疑い、本当に誠実な生き方を問うてほしいと望んでいる。「私たちは何も持たずに生まれ、本当に大切なものは『ものさし』を身に着ける前からあるということに気付いてほしい」と話す教授の姿が印象的だった。

死ぬということはいかに生きるかを考えさせてくれる。生きていることと死ぬことは別々ではなく、つながっている。生きるから死に、死ぬから生きるのである。（山須田優）



藤井美和教授＝8月6日、藤井教授研究室、渡邊暖菜撮影

関学神戸三田キャンパスから一番近い教習所

● 取得できる車種 ●

大型車・中型車・準中型車・普通車(AT/MT)・
大型二輪車(AT/MT)・普通二輪車(AT/MT)

お申込みは、大学生協サービスカウンターにて受付できます。

SANDA AUTOMOBILE SCHOOL
SAS
SINCE 1963

兵庫県公安委員会指定

三田自動車学院

三田市志手原1147-1 TEL:079-562-2995
E-mail:sas.1963@poppy.pcn.ne.jp HP:www.sas-menkyokaiden.com



三田自動車学院携帯用HP QRコード